

● シリーズ 私の見た日本 Vol.246

日本における歩行者の眼差しの記録 ——ペルーから長野へ

Rufasto Nanez Alejandro (ルファスト・ニャネス・アレハンドロ)

ペルー・チクラヨ出身。大学卒業後、現地の建設・設計会社にて住宅や学校、病院、インフラなどのプロジェクトに従事し、母校での研究助手も務める。2023年後半より信州大学の佐倉研究室に研究生として所属し、現在は同大学院の修士課程に在籍。在学中は、京都大学での国際シンポジウムや中国・昆明大学での国際ワークショップに参加したほか、コロンビアの学会誌で共同論文を発表するなど、国際的に活動を展開。



始まりの地、そして日本への憧憬

私は、ペルー北西部のラムバイエケ州にあるチクラヨという都市で生まれ、幼少期を過ごしました(写真1、2)。2019年に大学の学部課程を修了した後、私は病院の設計や建設会社、そして調査研究機関で4年間、建築の実務に携わってきました。現在は信州大学で研究生を経て修士課程に在籍し、日々研究に励んでいます。私が日本を目指した最初の動機は、高校3年生の時に履修した都市デザインや都市計画、地域計画の講義に遡ります。当時、故郷の近くにある漁師町の復興計画に参加する機会があり、それをきっかけに都市開発という分野に強く惹かれるようになりました。

卒業後、仕事を通じて日本のコミュニティやJICA(国際協力機構)のボランティアの方々と接する機会がありました。彼らとの交流の中で、日本の言語や文化に興味を抱き、日本で学ぶための計画を立て始めたのです。調査を進めるうちに、日本の都市が直面している課題——地方中小都市の人口減少と、東京のような大都市への過密という二極化——を知りました。この発見が、私の研究の羅針盤を「都市の隙間(アーバン・ヴォイド)」、そして「都市の未来」という方向へと向けさせました。



写真1.チクラヨの一般的な公園



写真2.チクラヨの中央通り



写真3.公園での期間限定の水遊びの風景

チクラヨで過ごす最後の夜、私はこれが自分にとって初めての飛行機の旅であることを思い出していました。観光ではなく、学びのための旅です。パナマ、オランダ、韓国を経由する3日間の長い道のりを前に、私の心は決意と期待、そして少しの不安が入り混じった複雑な感情で満たされていました。2年半に及ぶ準備期間を経て、ようやく新しいステージの幕が開こうとしていたのです。

都市のリズム：ペルーの熱気と長野の静寂

日本に到着し、ペルーで出会ったJICAボランティアの方に温かく迎えられました。東京で数日間、大都市の象徴的なランドマークやその圧倒的な生活のリズムを観察した後、私は長野へと向かいました。長野は、研究室の仲間たちと生活を共にする中で、私にとっての「第二の故郷」となりました。

長野での生活に慣れるにつれ、ペルーと日本の間には「都市の生活リズム」に決定的な違いがあることに気づきました。

ペルーの都市では、市場や寺院、市役所の周辺といった都市の拠点(ノード)が早朝5時頃から動き出します。商人が露店を構え、商品を準備する音とともに街に活気が生まれます。この

「にぎわい」は一日中途切れることがなく、午後から夕方にかけてさらに勢いを増していきます。一方で、日本、特に長野における「にぎわい」は、駅周辺や特定の通勤ルートに非常に限定されています。午前8時半を過ぎると、街路からは人影が消え、走っているのは配達車両か観光客だけのように見えます。商店の多くは10時にならないと開きません。午後も同様で、善光寺周辺の店が閉まる午後5時を過ぎると、セントラルスクウェアのような場所であっても活動が極端に少なくなります。長野のような日本の地方都市は、特定の時間にのみ「起動」する街であるという印象を強く持ちました。

私は知的好奇心に突き動かされ、半年間で靴を一足履き潰してしまうほど長野の街を歩き回りました。その歩行の記録から、二つの結論を得ました。

第一に、日本人もペルー人と同じように非常に親切であるということです。言葉が十分に通じなくても、彼らは私を迎え入れようとしてくれました。新住民の集まり、ボーイスカウト、二つの盆踊り、そしてアートグループへの参加を通じて、私は地域に溶け込むことができました。興味深かったのは、これらの活動の多くが「屋内」で行われていたことです。外を歩いている

だけでは、中で何かが行われているとは気づかないことも少なくありません。

第二に、公園や広場といった公共空間が、イベントや祭りの時にしか活性化しないという点です(写真3)。ペルーでは平日でも子供たちが通りで遊んでいる光景が日常的ですが、日本ではそうではありません。この「空間の使われ方の違い」こそが、私の修士研究の大きなトリガーとなりました。

学術的实践：「まち畑プロジェクト」での学び

研究生として、そして修士課程の学生として、私は「まち畑プロジェクト」に参加してきました。2016年に指導教員である佐倉弘祐先生の主導で始まったこのプロジェクトは、善光寺近くにある3つの都市の空地に介入し、それらを「コミュニティ・ガーデン」へと変貌させる試みです。このプロジェクトを通じて、私は実際の都市介入(アーバン・インターベンション)の全プロセスを学ぶことができました。例えば「ヤギのいる庭」では、ヤギを飼うことで子供や高齢者を惹きつけ、そこから循環型の仕組みを構築しました(写真4)。「ラ・ランコントルの裏庭」では、レストランから出る廃棄物を野菜栽培のための堆肥として活用しています(写真5)。プロジェクトの起点となった「すけろくガーデン」は、民家の改修から始まり、ピザ窯や鶏小屋、建設ワークショップを備えた多機能な空間へと進化しました(写真6)。

これらの経験は、スペインからの招聘教授を交えた国際ワークショップへと発展し、共同執筆による国際的な出版物として結実しました。

考察：都市の隙間に新たな息吹を

「まち畑プロジェクト」での実践を経て、私の中に一つの問いが芽生えました。「すべての都市の隙間をコミュニティ・ガーデンにすべきなのか。あるいは、日本の人口減少や低出生率という現状に、より適した活用方法があるのではないか」という問いです。

その答えを求めて辿り着いたのが、「都市の鍼治療(アーバン・アクパンクチャー)」と呼ばれる小規模な介入の手法でした。コミュニティ・ガーデンも一つの有効なアプローチですが、「タクティカル・アーバンイズム(戦術的都市計画)」や「ポケットスペース」といった概念の方が、現代日本のダイナミズムにより柔軟に適応できるのではないかと考えたのです。現在、日本の都市の隙間(空地)は、私有地であれば駐車場に、公共地であれば画一的な公園(プレイグラウンド)にされることが多く、その多くは十分に活用されていません(写真7)。コミュニティ・ガーデンは素晴らしい代替案ですが、時に「特定の目的を持った人が訪れる場所(目的地)」に限定されてしまい、日常の「通過点」としての機能を持ちにくい側面があります。私が提唱したい「ポケットスペース」の概念は、500㎡以下の低利用地を活用し、日常の移動ルートの中で人々がふと立ち寄れる「遷移空間(トランジショナル・スペース)」に焦点を当てることで、都市のモビリティ(移動性)を強化す

ることができます。これを長野のような街に適用すれば、ポケットスペースは人々の日常生活の中に自然に溶け込み、移動の合間にちょっとした活動や交流が生まれる場所となるでしょう。

結びに代えて：歩き続ける眼差し

来日したばかりの頃は、道に迷うことや複雑な鉄道システムへの恐怖から、遠出をすることができませんでした。しかし今では、学術的な調査だけでなく個人的な興味からも、新潟、富山、京都、大阪、名古屋、東京など多くの都市を訪れるようになりました。

どの街に行っても、私は必ず自分の足で歩くようにしています。歩くことでしか見えてこない、その土地の人々のダイナミズムがあるからです。この尽きることのない好奇心を持ち続け、これからも日本の都市を研究していきたいと考えています。人々の移動パターンを読み解き、都市の隙間に新しい価値を見出すことで、未来の新しい都市モデルの定義に貢献することが私の願いです。



左上/写真4.ヤギのいる庭



右上/写真5.ラ・ランコントルの裏庭

左下/写真6.すけろくガーデン

右下/写真7.画一的な公園